

---

# 魔法少女リリカルなのは～雷炎の拳帝～

紅の牙

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは〜雷炎の拳帝〜

### 【Nコード】

N8474Y

### 【作者名】

紅の牙

### 【あらすじ】

陸士108部隊に所属する主人公が新設される部隊に出向。そこで彼は、何をするのか？Strikers編です。なお、主人公は転生者ではありませんがそれなりにチートです。さらにハーレムになるかもしれませんby作者

## 第1話+プロローグ

「ZZZZZZZZ」

とある陸士部隊の屋上にあるベンチで気持ちよさそうに寝ている青年がいた。つーか勤務中に何で寝てるの！？ by 作者

「あゝやっぱりここにいた！予想通り寝てるし」

ドアが開き、浅紫色の女性が屋上来、寝ている青年に近づいた

「先輩、起きてください。先輩！！」

「ZZZZZZZZ」

女性が青年をゆすっているが、青年は一向に起きない

「……………これって、チャンスよね？」

女性は拳を握り

「はあっ！…！」

青年の腹を思いつ切り殴った。だが、

「……………もう少し、気配を消せ。バレバレだぞ？」

青年は女性の拳を手の甲で防いでいた

「まったく、人が気持ちよく寝てるって時に、何の用だ？」

青年は欠伸をしながら聞いた

「おとう、部隊長が呼んでいたので連絡に来たんですよ」

「部隊長が？・・・俺なんかしたっけか？」

青年は考え始めた

「・・・まあ、行けば解るか。サンキュー、ギンガ」

青年は女性、ギンガ・ナカジマの頭を撫でた

ギンガ：「っちょ、撫でないでよお兄ちゃん／＼」

ギンガは顔を紅くして言った

「うん？ああ、悪い、悪い。いつもの癖でな。それと、仕事中はお兄ちゃんって呼ぶなって言ってるんだろっが」

ギンガ：「っつう、ご、ごめんなさい」

「っふ、冗談だ。休憩時間中は別に問題ねえよ」

そう言い、再びギンガの頭を撫でた後、青年は部隊長室に向かった

「部隊長、……………」

「おう、入っていいぞ」

「失礼します」

青年はドアをノックし、確認を取り、部屋に入った

「取りあえず、すわれ」

「はい」

青年は椅子に座り、部隊長と向き合った

「それで部隊長、俺に話とは？」

「今は俺とお前の二人しかいねえから、いつも通りの口調でいいぞ」

「それじゃあ。ゲンヤさん、俺に話があるってきいたんですが？」

青年はこの部隊長ゲンヤ・ナカジマに溜め口で話した

ゲンヤ：「……………、お前機動六課って聞いたことあるか？」

「ええ、聞いたことありますよ。確か、新設される部隊ですよ、

期限は1年間ですけど。それが、どうかしたんですか？」

ゲンヤ：「お前にそこに行って貰いてえんだ」

「俺が！？何でまた？」

ゲンヤ：「何でも、戦力不足でな。俺に頼んできたんだよ。これが、六課の全メンバーのリストだ」

ゲンヤは青年に資料を渡した

「拝見します。……………どんな裏ワザ使ったんですか？」

青年は資料を見て驚き半分、呆れ半分でゲンヤに聞いた

ゲンヤ：「あいつは色々とコネがあるからな」

「まさか、こんな早く夢をかなえるとわな。しかも、俺より階級上だし」

ゲンヤ：「そう言えば、お前、あいつと仲良かったな」

「ええ。同じ地球出身同士ですしね。まあ、出身地は違うし、更に俺は家族全員がこっち引っ越してきちゃいましたけど」

ゲンヤ：「それで、行ってくれるか？」

「いいですよ。なんか面白いことが起きそうな気がするんでね」

ゲンヤ：「まあ、理由はこの際置いて。頼んだぞ、龍」

龍：「うっす」

こうして、時雨龍の機動六課出向が決まった

## 第1話＋プロローグ（後書き）

紅：「5作目の小説が始まりました」

龍：「こりもせずまた書き始めたか」

紅：「つぐ、返す言葉もない」

龍：「まあ、他の奴もちゃんと書けよ」

紅：「ああ。少し遅くなるかもしれないがな」

龍：「まあ、こんな作者ですが。なにとぞよろしくお願いします」

## 設定 1

名前 時雨龍

容姿 REBORNのボンゴレ?世(髪は黒)

年齢 19歳

この小説の主人公。陸士108部隊に所属しており階級は一等陸尉。過去に地球に住んでいたが、都合により家族全員で引越してきた。弟と妹がいる。更には・・・もいる(ここは後でわかりますby作者)。管理局員には雷炎の拳帝と呼ばれている。戦闘スタイルは拳や脚を使つての格闘で管理局最強のインファイターと言われている(本人はそう思っていない)。ナカジマ家とは知り合いで、スバルやギンガには兄さんやにいと呼ばれている

魔力保持量 S

魔道士ランク 陸戦S+ (空中戦もできるが陸士で登録している)

魔力光 紅

変換資質 炎熱、電気

レアスキル ????

BJ ゴッドイーターのF制式上衣と下衣のレッド。尚、両腰に

仮面ライダーWで出てくるメモリスロットがついおり（右に1つ、左に3つ）、此処にUSBタイプのカートリッジを入れ、ロードする。右は装填用で、左はチャージ用

## デバイス

### ジヨット（インテリジェントデバイス）

待機状態はブレスレッド。起動時は紅いグローブ（REBORNでツナが使うもの形状はVG）。家に昔からあるもので、地球にいらるとき龍が偶然さわり起動した。性格は冷静沈着だが内に熱いものを秘めている。魔力の物理エネルギー変換や、クイックチャージ等の機能が搭載されている

## 第2話 『機動六課』

龍 side

機動六課が起動してから二日後

龍：「やっと、引継ぎが終わった」

俺は仕事の引き継ぎ作業を終わらせ、荷物を持ち隊舎の外に出た。出ると、ゲンヤさんとギンガが俺を待っていた

ゲンヤ：「それじゃ龍、元気でやれよ。それと、嬢ちゃんとスバルによろしく言っといってくれ」

ギンガ：「兄さん、スバルの事よろしくね」

龍：「あいよ」

俺は二人と話し終えた後、バイクに乗り、六課に向かった

龍 side end

はやて side

はやて：「くくく」

六課の部隊長室で私は鼻歌を歌いながら仕事をしていた

リン：「ごきげんですね、はやてちゃん」

私の補佐であり二代目祝福の風リンフォース・ツヴァイがそう  
言った

はやて：「今日は108部隊から一人ここに来るからな」

リン：「ああ、そう言えば今日でしたね、龍さんがくるのは」

はやて：「せや、もう、楽しみで楽しみでしょうがないんや」

リンとそんな話をしていると

『八神部隊長、108部隊の方がお見えですが』

フロントから連絡が入った

はやて：「お通しして」

『解りました』

そして数分後、ドアがノックされた

はやて：「どうぞ」

ドアが開き、そこには

龍：「失礼します」

私の好きな人がおった

はやてside end

龍 side

バイクに乗って約30分後、俺は機動六課に着いた

龍：「随分とでかいな、お前もそう思わないか、ジヨット」

俺は相棒のジヨットに話しかけた

ジヨット：『期間限定の部隊にしては大きすぎるだろう』

龍：「バックにいる人物が解ってるからな」

俺はバイクをガレージに止め、隊舎に入った

龍：「すみません、陸士108部隊から出向してきた時雨龍一等陸尉です。此処の部隊長にお会いしたいんですが」

俺は受付の人に言った

「少々お待ちください」

受付の女性が回線を開き、話し始め。それが終わると、俺を部長室まで案内してくれた。部隊長室に着くと、女性は仕事に戻った。俺はドアを叩き返事を待った

はやて：「どうぞ」

龍：「失礼します」

返事が返ってきたので、俺は部屋に入った

龍：「108部隊から出向してきた、時雨龍一等陸尉です。これからよろしく願います」

俺ははやてに敬礼をした

はやて：「私が部隊長の八神はやてです。機動六課によっこそ」

はやても俺に敬礼をした

はやて：「っと、まあ硬い挨拶はここまでにして。久しぶりやな、龍君」

龍：「そうだな、一年ぶりぐらいか？」

はやて：「そうやね、このごろ龍君の家に遊びに行つてなかつたし、多分そんなぐらいや。皆元気にしとるん？」

龍：「ああ、元気でやつてるよ。今頃あいつはインターミドルに向けて練習してるんじゃないか」

はやて：「取りあえず、皆に紹介したいさかい、一緒に来てくれるか？」

龍：「ああ」

俺ははやてに連れられ、集会場に向かった

俺達が会場に着くと、多くの局員がいた

はやて：「え、今日は皆に陸士108部隊から来た方を紹介します。時雨龍一等陸尉です。彼には遊撃隊として、隊長陣並びにFW陣と行動してもらいます。時雨一等陸尉、挨拶をお願いします」

はやてに言われ、俺は挨拶を始めた

龍：「時雨龍です。この一年間よろしく願います」

はやて：「では、これで時雨龍さんの挨拶を終わります。皆、仕

事に戻ってください」

龍 side end

挨拶が終わり、局員が仕事に戻った。今、場にいるのは、龍、はやて、隊長陣、FW陣のみだ

スバル：「いにい〜」

スバルが龍に抱きついた

龍：「おっと、久しぶりだなスバル。元気だったか？」

スバル：「うん」

龍：「ティアナも元気そうでしたよ」

ティアナ：「お、お久しぶりです、龍さん」

はやて：「何や、スバルとティアナは龍君の事知ってるんか？」

はやてが二人に聞いた

スバル：「はい。小さいころから遊んでくれましたし、それにお父さんと職場が同じなので」

ティアナ：「私は訓練校時代にお会いしました」

はやて：「取りあえず、皆挨拶はしとこうか」

なのは：「スターズ分隊隊長の高町なのは一等空尉です。よろしくお願いします」

ヴィータ：「同じくスターズ分隊副隊長のヴィータ3等空尉だ」

スバル：「え〜と、スターズ3、スバル・ナカジマ二等陸士であります」

ティアナ：「同じく、スターズ4、ティアナ・ランスター二等陸士であります」

はやて：「この四人がスターズ分隊で次が・・・」

フェイト：「ライトニング分隊長、フェイト・T・ハラオウン  
執務管です」

シグナム：「ライトニング分隊副隊長、シグナム二等空尉だ」

エリオ：「ライトニング3、エリオ・モンディアル三等陸士であります」

キャラ：「同じく、ライトニング4、キャラ・ル・ルシエ三等陸士であります。こっちはパートナーのフリードです」

フリード：「きゅ〜」

龍：「時雨龍一等陸尉だ。かったっ苦しいのは苦手だから、龍さんでも龍にいても好きなようによんでくれ。それと、久しぶりだな

フェイト執務管」

龍はフェイトの声を掛けた

フェイト：「は、はい。あの時はありがとうございました」

フェイトは龍にお礼を言った

はやて：「うん？フェイトちゃん、龍君の事知ってるん？」

フェイト：「うん。随分前に違法魔道士を逮捕するとき、結構ピンチになってね。その時に助けてくれたんだ」

龍：「まあ、たまたまその日が休みでな、プラプラしてたら派手な音が聞こえて行ってみればピンチだったから助けたんだよ」

はやて：「ふ〜ん（それだけじゃない、フェイトちゃんも龍君に絶対惚れとる。私の感がそう言っとる!!!）」

なのは：「じゃあ、訓練も兼ねて時雨一等陸尉の戦い方を見て見ようか」

龍：「俺の戦い方？」

なのは：「は、はい。だめですか？」

龍：「嫌、別に問題ないです。行き成りだったんでびっくりしただけです」

なのは：「それじゃあ、皆行こうか」

龍：「あ、それと高町一等空尉。同じ年なんで、呼び捨てでいいですよ」

なのは：「じゃあ、龍君って呼んでもいいですか？私の事はなのはでいいから」

龍：「解った。よろしくな、なのは」

こうしてなのは達は龍の実力を見る為に訓練スペースに向かった

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8474y/>

---

魔法少女リリカルなのは～雷炎の拳帝～

2011年11月27日00時52分発行